

現代教師像の研究 (二)

荒井貞雄

序

一、問題

二、研究方法

三、整理方法

四、結果の概要

五、比較考察

六、要約

序

現代教師像の研究(一)は、既に本誌第五卷第一号に報告された。その内容は児童生徒に「最も良い先生であつた」と云う教師の資質を生徒に依つてとらえた結果であつた。研究報告(二)に於ては、児童生徒に評価された現職にある教師が、彼等の胸中にある良き教師の像を、彼等自身の手記に依つて、浮きぼりにしようとの試みである。前者は客観的にみた教師、後者は主観的にみた教師像である。

一、問題

次の各項を究明しようとするにある。

現代教師像の研究

- 1、現職教師の観た教師像構成要素の序列
- 2、その要素を形成する内容の分析
- 3、生徒と教師との比較

二、研究方法

1、時期

調査は昭和三十二年九月より十二月に亘つて、当時の相愛女子短大第二学年の教育実習生諸君の一部分が、筆者の計画に基づき、一部の実習協力校の校長指揮のもとに、当該校の教官について実施した。

2、調査形式

調査は自由記述法を用い、使用した用紙は26cm×26cmの白紙の上部に下記の如く印刷してある。用紙は各学校に於て、昼食時教員室に於て、校長又は教頭から趣旨の説明があり、その時、その場所に居合わせた教官に一枚ずつ渡され、翌日同時刻に蒐集し、一日程度の時間は待つて終結し、別に Follow up

相愛教生教育資料11

御多忙中恐れ入りますが、教生教育のため次の問題につき御意見をおもろし下さい。

教職経験年数	_____
専門教科	_____
男 女 (何れかを消す) 年 令	_____
学 校 名	_____

先生の御経験と信条にてらして、すぐれた教師、よい教師の思想、資質、在り方等について持たねばならぬとお考えになるものを数項に別けて簡単にご意見をたまわり度い。(御参考迄に専門教科、性格、趣味、指導、研修、教養、教職教養、社会集団生活等との関係)必要なときは裏を用いて下さい。

第1表 調査校種及び調査者統計

校 種	小学校	中学校	高 校	計
数	2	5	3	10
被調査者数	20	133	65	218
回 答 者 数	14(2)	100(19)	48(2)	162(23)
回答率(%)	70.0	75.2	73.8	74.3

註 ()内は女子教員

第2表 教歴年数に依る回答者調

教 歴 年 数 別	回 答 者 数	%
1 0 年 以 下	84 (16)	52
自 10年 至 20年	50 (6)	31
2 0 年 以 上	28 (1)	17
計	162 (23)	100.0

註 ()内は女子教員

三、整 理 方 法

次の原則によつて資料を整理した。

- 1、筆者及び訓練された四人の音楽学部の教生によつて、全く各々独立的に全資料を読破し、要素及其その内容を分類した。この場合に用いた要素分類は、研究報告(一)で提示したものを基礎とした。即ち、性格、趣味、教養、教育精神、教材、指導技術及び探究態度の七分類である。

は行わなかつた。又、強制的な印象は更になく、むしろ好意的雰囲気のうちに行われた。

3、調 査 対 象

小学、中学及高校の教官一六二名にして、相愛学園の二校を除く八校は、何れも大阪市内の公立学校である。その内訳は第一及び第二表に示す通りである。

2、以上の七分類の範疇に包含出来ない多くの反応については、研究協議の結果、職場に於ける人的交渉関係及び父兄との交渉関係の二要素を追加した。

3、さきに分類したものを九分類によつて各自が整理した。九分類の範疇に属し得ないものは除去した。除去したものは七反応のみであつた。

4、六人に依つて整理された結果を長時間に亘つて調整した。

5、各要素一反応の原則に依つて整理した。即ち同じ要素に対し、二つ以上の反応のあつた場合は主なるものをも一つ取り入れ、主なるものと判定することが困難な時には全部除去した。然し全部除去したものは全体を通じ六件のみであつた。

6、教職歴年数を次の三段階に分化し、それに依つて要素及び反応を再配置した。

a、十年以内

b、十年乃至二十年

c、二十年以上

7、専門教科及び性別の分析は余り著しい特徴は見られないのでこの報告から割愛した。但し年令差はその反応に判然と現れたが、これは教歴年数で扱うことにした。

8、記述のうち、同じ要素の範疇で意味の不明瞭なもの、相矛盾した記述等は凡て除却した。

9、各反応に対し、数値評価は行わなかつた。

第3表

反応に現れた教師像構成要素順位

教歴別 構成要素	10年以下			自10年至20年			20年以上			全 体		
	回答率 (%)	因子 種数	反応 順位									
一般教養	100.0	24	1	96.0	13	1	100.0	6	1	98.8	27	1
学識・専門・教材	83.3	11	2	84.0	8	2	82.1	5	3	83.3	14	2
研修態度	72.6	13	4	76.0	10	4	96.4	5	2	81.5	13	3
性格・人格	47.6	12	3	82.0	10	3	75.0	5	4	63.6	12	4
生徒との関係	47.6	10	5	54.0	7	5	67.8	6	5	53.1	10	5
職場人的関係	47.6	8	5	48.0	8	6	64.3	6	6	50.0	12	6
指導能力	36.9	8	6	36.0	7	7	53.5	4	7	39.5	11	7
趣味	20.9	7	7	30.0	6	8	29.3	4	9	32.7	10	8
父兄との関係	20.2	3	8	24.0	5	9	46.4	4	8	25.3	6	9

四、結果の概要

この項に於ては、一六二名の教師全体の結果と教職歴年別の結果とを扱うことにした。

1、教師像構成要素の順位を第3表に依つてみると

a、全体としても、三段階による教歴別に見ても、一般教養が断然高い率を示して居る。

b、第二に位する要素は、学識、専門知識、教材のマスタリーの一連の学問方面の教養である。

c、第三位は研修態度である。この要素に対する教歴段階の反応を見ると顕著な傾向が現れて居る。即ち

一〇年以前の教歴者 七二% (六〇名)
自一〇年至二〇年 七六% (三五名)

二〇年以上 九六% (二七名)

全体としては 八一% (一二二名)

右の如き数値を示して居る。二〇年以上の教歴者二七名中には校長六、教頭一が含まれて居り、云わば教育のベテランである。この教育経験者が、九六%の高率を研修態度に示した事實は、極めて意味深い発見であると考ええる。

d、教師の人格性格以下の各要素のうち、第六位の職場に於ける人間関係である。同僚、校長、指導主事等との具体的関係についての吟味考察は後に来る反応の項に譲るとしても、対学習者関係以外に、職場に於ける人間関係が、現代教師に学習指導能力以上に重要な要素として現れて居る点に注目せねばならぬ。この発見も著者の全く予期せざるものであつた。

2、要素の分析——教師像構成要素の因子

内容分析は第4表に依つて九つの要素について順を追つて試みることにする。各表にその内容はよく現れて居るが、表を見るのに若干の説明が必要かと思われる。

順位は因子の頻度の高いものからはしまつて居り、各因子についての数字は頻度数を示し、つづいて反応%の枠内の数字は頻度数全体に対する百分率である。又反応者数と因子数とは必ず一致せねばならぬ。それは資料整理方法(原則5)に従つて、各要素一反応一因子採択に依つた故である。

第4表の1

一般教養の内容分析

内容 順位	因子及び数値														計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
10年以下 84 84名 100%	高い教養の持主10	人生観見識の確立せること10	もの10 教育者の誇りをもつ	視野の広いこと8	常識的であること7	物事を客観的に見る 人6	知性豊かなること5	建設的思想5	男女間の道徳を守る 人4	社会の要求を理解出 来る2	世論に従順である2	真の市民たる自覚2	暴力等を用いないこ と2	その他11	84
反応%	11.9	11.9	11.9	9.5	8.3	7.1	5.9	5.9	4.7	2.3	2.3	2.3	2.3	13.1	99.4
自10年 至20年 48 50名 96.0%	人生観見識の確立せること12	高い教養の持主8	もの8 教育者の誇りをもつ	物事を客観的に見る 人4	建設的思想4	知性豊かなること2	視野の広いこと2	常識的であること2	社会の要求を理解出 来る2	男女間の道徳を守る 人1	其の他3				48
反応%	24.7	16.5	16.5	8.3	8.3	4.1	4.1	4.1	4.1	2.1	6.4				99.2
20年以上 28 28名 100%	人生観見識の確立せること14	教育者の誇りをもつ もの6	知性豊かなること2	視野の広いこと2	物事を客観的に見る 人2	暴力等を用いないこ と2									28
反応%	50.2	21.4	7.1	7.1	7.1	7.1									100.0
全 体 160 162名 98.8%	人生観見識の確立せること36	教育者の誇りをもつ もの24	高い教養の持主18	物事を客観的に見る 人12	視野の広いこと12	知性豊かなること9	建設的思想9	常識的であること9	男女間の道徳を守る 人5	社会の要求を理解出 来る4	世論に従順である2	真の市民たるの自覚2	暴力等を用いないこ と2	その他14	160
反応%	22.5	15.0	11.2	7.5	7.5	5.6	5.6	5.6	3.1	2.5	1.2	1.2	1.2	9.4	99.2

4表の1 一般 教養

a、最も顕著なる反応は、その全体を見る時

人生観、識見の確立せる事

二二・五%

教育者の誇りを持つ事

一五・〇%

高い教養知性を持つ事

一一・二%

計四八・七%である。

特に、これを教歴段階から見ると、その反応は更に著しい傾向を示して居る。即ち、以上の三因子の合計率は

一〇年以下の群

三五・七% (八四名中三〇名)

一〇年―二〇年群

五七・七% (四八名中二八名)

二〇年以上の群

七八・八% (二八名中二二名)

である。この事實は、教育者が経験をつむに従つて、上述の如き哲学、教養、知性を要求するかと云うことを最も端的に物語つて居る。

b、反応因子の種類については、二〇年以上群よりは一〇年以下群は、六に対し二四を示し、経験者ははつきりした反応を示して居る。この因子の種類の多いと云うことは、内容が豊富であるとか、教養の幅が広いとも云い得る。又種類が少いと云うことは教育者教養にははつきりした、信念に基いた一点を強く示されて居るとも解し得るのである。けだし筆者の観察では、反応者を具体的に知るだけに、即ち深い高い又広い教養の持主だけに、長い経験から来た教育信条に基いた結果の現れだと考えられるのである。

第4表の2 学識・専門知識（教材を含む）の分析

内容 順位	反 応 及 び 数 値										計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
10年以下 70名 84名 83.3%	教材に対する絶対性 17	博文学識 15	学習者の理解 14	指導技術が豊富 10	教育哲学・原理 4	教育信条の確立 3	社会変化に適応 2	学問の新鮮味 2	その他 3		70
反応%	24.2	21.4	20.0	14.3	5.7	4.3	2.9	2.9	4.3		100.0
自10年 至20年 42名 50名 84%	教材に対する絶対性 15	博学・学識 7	教育・哲学・原理 5	学習者の理解 5	指導技術の豊富 2	教育信条の確立 2	学問の総合性 2	学問の新鮮味 2			42
反応%	35.7	16.6	16.6	11.9	4.8	4.8	4.8	4.8			99.8
20年以上 23名 28名 82.1%	教育・哲学・原理 7	博学・学識 6	教材に対する絶対性 4	教育信条の確立 3	学問の総合性 3						23
反応%	30.5	26.1	17.4	13.0	13.0						100.0
全 体 135名 162名 83.3%	教材に対する絶対性 36	博学・学識 28	学習者の理解 19	教育・哲学・原理 18	指導技術の豊富 12	教育信条の確立 8	学問の総合性 5	学問の新鮮味 4	社会変化に対する適 応 2	その他 3	135
反応%	26.7	20.6	14.7	13.3	8.9	5.9	3.7	2.8	1.3	2.1	100.0

4表の2 学識・専門知識・教材のマスタリー

a、専門教養として、教材、学習者に関する知識、教育学、指導に関する知識技術等の因子が一般教養について高い反応を示した事は、現職者の切実さを物語るものである。これはすべて教材に関するものであると同時に、

第4表の3 研究態度の分析

内容 順位 教歴及 回答率	反 応 及 び 数 値													
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	
10年以下 60 84名 72.6%	生徒と共に勉強する10	指導技術の困難を自覚する10	共同研究を歓迎8	自発的研究6	実験的態度5	見解を重視する5	研究生たるの自覚4	研究生たるの自覚4	自己反省4	事務に終らないで研究する2	教材以外のものにも向う2	自己の人間完成を志す2	その他2	60
反応%	16.5	16.5	13.4	10.0	8.3	8.3	6.6	6.6	3.3	3.3	3.3	3.3	99.8	
自10年 至20年 35 50名 76.0%	自己反省9	教材以外のものにも向う4	生徒と共に勉強する4	自己の人間完成を志す4	研究生たるの自覚3	指導技術の困難を自覚する3	事務に終らないで研究する2	自発的研究2	見解を重視する2	共同研究を歓迎2			35	
反応%	25.7	11.4	11.4	11.4	8.6	8.6	5.7	5.7	5.7	5.7			99.9	
20年以上 27 28名 96.4%	自己反省10	自己の人間完成を志す7	研究生たるの自覚5	教務以外のものにも向う3	自発的研究2								27	
反応%	36.9	25.9	18.6	11.1	7.4								99.9	
全 体 122 162名 81.5%	自己反省23	生徒と共に勉強する14	自己の人間完成を志す13	指導技術の困難を自覚する13	研究生たるの自覚12	自発的研究10	共同研究を歓迎10	教材以外のものにも向う9	見解を重視する7	実験的態度5	事務に終らないで研究する4	その他2	122	
反応%	18.8	11.4	10.6	10.6	9.9	8.2	8.2	7.4	5.7	4.1	3.3	1.6	100.0	

b、二〇年までの教歴者には、教材マスターが絶対価値として高率を示して居るのに対し、二〇年以上の教育作用を左右する学力に直結するものであるだけに、経験者には生命的意味をもつものである。

テランは教育原理及び哲学が高く評価されて居る点に注目せねばならぬと思う。

4 表の3 研修態度

a、自己反省、自己の人間完成を志す、研究生たるの自覚、指導技術の困難性の自覚、自発的研究等によつて七〇%を占めて居る。これは、すべて教師の内的自覚に俟たねばならぬ因子のみである。而かも、教える為の教材研究態度の範囲が、非常に拡大された人間完成の人生の根本問題に反応の根拠が置かれて居ることは見のさせない点である。特に二〇年以上の教歴者に於てこの傾向が判然として居る。

b、次に指摘せねばならぬ事は、生徒と共に勉強する、共同研究の歓迎と云う反応が二〇%を示して居る。これは近代教育学の傾向である事が、教師の間に判然と現れて居ると云えよう。

c、二〇年以上の群は、その反応因子が少数に限られて居る事も特徴と云えよう。

4 表の4 人格・性格の分析

a、人格要素に於て最も意外なる発見は、積極性、進歩革新性、責任感、社会性及び公平等の因子が六六%の高率を示した点である。明朗、隠健、従順等の因子は僅かに一八%を示したに過ぎない。この予期せざる傾向は、教職歴の三段階を通じてほぼ同一歩調を示して居る点も亦興味ある事である。これは、日本の教育界は動いて居る、建設途上にある、曲節を経て居ると云うことの反映でもあると云えよう。

第4表の4 人格・性格の分析

内容 順位 教歴及 回答率	反 応 及 び 数 値												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
10年以下 $\frac{40}{54}$ 名 47.6%	積極性・熱心8	進歩革新性6	社会性に富む5	明朗性5	公平5	責任感の強いこと3	冷静2	誠実性2	穏健1	忍耐性1	素直に他人に傾聴する1	寛容1	40
反応%	20.0	15.0	12.5	12.5	12.5	7.5	5.0	5.0	2.5	2.5	2.5	2.5	100.0
自10年 至20年 $\frac{41}{50}$ 名 82.0%	社会性に富む9	責任感の強いこと6	公平5	寛容5	明朗性4	積極性・熱心4	進歩革新性4	素直に他人に傾聴する2	穏健1	誠実性1			41
反応%	21.9	14.6	12.1	12.1	9.7	9.7	9.7	4.8	2.4	2.4			99.5
20年以上 $\frac{21}{28}$ 名 75%	責任感の強いこと6	積極性・熱心6	穏健4	誠実性4	進歩革新性1								26
反応%	28.5	28.5	19.0	19.0	4.7								100.0
全 体 $\frac{102}{162}$ 名 63.6%	積極性・熱心18	責任感の強いこと15	社会性に富む14	公平10	進歩・革新性10	明朗性9	誠実性7	寛容6	穏健6	素直に他人に傾聴する4	冷静2	忍耐性1	102
反応%	17.7	14.7	13.7	9.8	9.8	8.8	6.9	5.9	5.9	3.9	2.0	1.0	100.0

b、こゝには、親切とか、ユーモアとか威厳のあるとか、潔癖とか清潔とかの反応は、殆んどその影を消して居ることである。

第4表の5 生徒との関係の分析

内容 順位	反 応 及 び 数 値												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
10年以下 42 80名 47.6%	愛情をもつて接する 10	生徒を理解する 8	生徒から信頼される 8	総合診断技術 3	生徒の具体的な事をよく知る 3	よき相談相手となる 2	生徒となれ合になら ない 2	骨惜しみなく努力する 2	感化力 2	生徒にとけ入る態度 2			42
反応%	23.6	19.0	19.0	7.0	7.0	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8			99.6
自10年 至20年 27 50名 54%	愛情をもつて接する 8	生徒を理解する 7	総合診断技術 3	生徒となれ合になら ない 3	よき相談相手となる 2	生徒から信頼される 2	生徒にとけ入る態度 2						27
反応%	28.5	25.9	11.1	11.1	7.4	7.4	7.4						99.8
20年以上 19 28名 67.8%	愛情をもつて接する 6	生徒から信頼される 4	生徒を理解する 3	総合診断技術 2	骨惜しみなく努力する 2	生徒にとけ入る態度 2							19
反応%	31.5	21.0	15.7	10.5	10.5	10.5							99.7
全 体 88 162名 53.1%	愛情をもつて接する 24	生徒を理解する 18	生徒から信頼される 14	総合診断技術 8	生徒にとけ入る態度 6	生徒となれ合になら ない 5	よき相談相手となる 4	骨惜しみなく努力する 4	感化力 2	よく知る 3			86
反応%	27.3	20.5	15.8	9.0	6.7	5.8	4.5	4.5	3.4	2.2			99.6

4表の5 生徒関係又は教育情熱
a、教育情熱、生徒を理解する努力、生徒から信頼されるの三反応が六四%の高率を示して居る。

b、総合診断技術の反応の現れた事は近代教育原理の反映かとも考えられる。又一面現職教師はこの種の技術になやまされて居るとも云えるのである。

c、生徒となれ合にならない、生徒にとけ入る態度等の反応が一三%も示して居ることも、半ば具体性をもつた教育精神の現れと云えよう。

4表の6 職場に於ける人的関係

この要素が一六二名の五〇%の反応を示すとは、著者の全く予想せざる事であつた。然かも教歴段階に分化して見ると、次の如くである。

一〇年以内群 四七・六% (八四名中三九名)

一〇年から二〇年群 四八・〇% (五〇名中二四名)

二〇年以上群 六四・三% (二八名中一八名)

以上の数値は、古参の教師、校長、教頭の階級になる程学校に於ける人的関係について関心が強く、良い教師は、この関係が正しく調整出来て居らねばならぬと云うことをはつきり示して居ると云えよう。

a、反応因子の整理をして見ると

協調の出来る人

一九・〇%

教育信条に忠実勇敢なる人

一六・四%

第4表の6

職場に於ける人的関係の分析

現代教師像の研究

内容 順位 教歴及 回答率	反 応 及 び 数 値												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
10年以下 39 84名 47.6%	交渉9 生徒を第一とする教 育信条に規定の人事	協調の出来る人5	独立で正しい判断の 出来る教師を起用の 5	いこと5 処世遊泳術を用いな い	位の高揚に努力する5 教委は教師の社会的 地位を高めることに努 力する	判的たれ5 教委の指示に対し批 評する	指導主事の権力に屈 しない3	校長・学校の方針に 協力2						39
反応%	23.0	12.7	12.7	12.7	12.7	12.7	7.7	5.1						99.3
自10年 至20年 24 50名 48%	協調の出来る人5	協長・学校の方針に 協力4	先輩・後輩の序を認 める3	交渉3 生徒を第一とする教 育信条に規定の人事	独立で正しい判断の 出来る教師を起用の 3	専門に相談する2 主事については指導 を受ける	真理の前には何人に もくつしない2	偏向教育者は排除す る2						24
反応%	20.8	16.6	12.5	12.5	12.5	8.3	8.3	8.3						99.8
20年以上 18 28名 64.3%	協調の出来る人5	協長・学校の方針に 協力4	交渉3 生徒を第一とする教 育信条に規定の人事	先輩・後輩の序を認 める2	いこと2 処世遊泳術を用いな い	偏向教育者は排除す る2								18
反応%	27.7	22.2	16.6	11.1	11.1	11.1								99.8
全 体 79 162名 50%	交渉13 生徒を第一とする教 育信条に規定の人事	協長・学校の方針に 協力10	独立で正しい判断の 出来る教師を起用の 8	いこと7 処世遊泳術を用いな い	先輩・後輩の序を認 める5	判的たれ5 教委の指示に対し批 評する	指導主事の権力に屈 しない3	偏向教育者は排除す る4						79
反応%	19.0	16.4	12.7	10.2	8.7	6.2	6.2	6.2	5.2	3.9	2.6	2.6		100.0

独立で判断の出来る人	一〇・二%
処世遊泳術を用いない人	八・七%
先輩後輩の序を守る人	六・二%
真理に忠実勇敢なる人	二・六%

計

六三・一%

学校社会に於て仕事をするものにとり、上述の六三%の内容を身につけることは当然の事である。更に、

校長の方針に協力する	一二・七%
指導主事に相談する	二・六%
偏向教育を排除する	五・二%

計

二〇・五%

この二〇・五%も集団、特に目的を共同遂行して居る以上当然守るべき内容である。然し乍ら現職の教師が当然の事に神経が敏感になる処に、現在の日本教育の問題類が潜在して居るのである。

b、特に

教育委員会は教師の地位高揚に努力すること	六・二%
指導主事の権力に屈しない	三・九%

計

一〇・一%

第4表の7 指導能力及技術の分析

内容 順位 教歴及 回答率	反 応 及 び 数 値											計			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11				
10年以下 31 84名 36.9%	技術のマスター1 発達段階に応じた指導	4 個人差に応ずる指導	4 目標意識の誘発技術	4 指導技術の高揚4	4 楽しい学習となる指導	4 導能力4	3 経験と知性を活かして	2 生徒と共同学習能力	2 いるかを反省する3	2 生徒と教材の相関を	2 究明しているか2				31
反応%	25.8	12.9	12.9	12.9	12.9	9.7	6.5	6.5							100
自10年 至20年 18 50名 26.0%	技術のマスター1 発達段階に応じた指導	4 指導技術の高揚3	3 楽しい学習となる指導	2 平等に扱う能力2	2 自発学習の導入力2	2 個人差に応ずる指導	2 目標意識の誘発技術2								18
反応%	22.2	16.6	16.5	11.1	11.1	11.1	11.1								99.8
20年以上 15 28名 53.5%	技術のマスター1 発達段階に応じた指導	4 生徒と共同学習能力	4 究明しているか4	2 生徒の経験を活かす											15
反応%	33.3	26.6	26.6	13.3											99.8
全 体 64 162名 39.5%	技術のマスター1 発達段階に応じた指導	7 導能力7	7 指導技術の高揚7	6 個人差に応ずる指導	6 目標意識の誘発技術	6 生徒と共同学習能力	6 生徒と教材の相関を	3 経験と知性を活かして	2 いるかを反省する3	2 究明しているか6	2 平等に扱う能力2	2 自発学習の導入力2	2 生徒の経験を活かす	2 工夫2	64
反応%	26.6	10.9	10.9	9.4	9.4	9.4	9.4	4.6	3.1	3.1	3.1	3.1	3.1	3.1	99.9

4表の7 学習指導能力と技術

以上の一〇％は常態に於ては、先ずあり得ない教師の精神現象である。

反応にあらわれた学習指導技術及び能力に関するものは予想に反し低調である。全体として見るとき、四〇％がこの要素に対し関心を示して居る。教歴年数段階に分化すると

一〇年以下の群 三六・九％

一〇年から二〇年群 二六・〇％

二〇年以上の群 五三・五％

二〇年以上の経験者が一番高い率を示して居る事は注意に価するところである。

a、その内容については、指導上あらゆる方面に亘つて居ることは極めて重要な点だと思われる。

b、特に、学習及び児童心理、教材と生徒生活との相関関係、学習目標と教材目標との関連性等にわたつて居ることは見のがすことの出来ない貴重な点である。

c、生徒の経験を如何に活かすかと云う反応などは、現代教育の焦点を突いた感がある。

4表の8 教師の趣味

a、趣味の研究で予想外の発見は、二六・四％の高率を示す、「教師は賭事、下品な趣味を高く評価しない」と云う反応因子である。下品な趣味と云う表現の内容についての解釈については、判然たるものが見当たらないが、性的に関するものでないかと思われる。賭事、性的関心は、ともに人間の本能に属するものであるだけに、この反応についての解釈はデリケートなものがある。けだし、現代社会悪の根源として賭事であり、性的異常を解し

第4表の8 趣味の内容分析

内容 順位	反 応 及 び 数 値										計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
10年以下 26 84名 30.9%	一芸に長ずること5	スポーツに関心をもち5	賭事下品な趣味を高く評価しない5	多趣味であること4	文学的関心の高いこと3	芸術的趣味2	科学的趣味2					26
反応%	19.2	19.2	19.2	15.4	11.4	7.6	7.6					99.6
自10年 至20年 15 50名 30%	賭事下品な趣味を高く評価しない5	スポーツに関心をもち3	多趣味であること2	趣味を教育に役立たせる2	専門と趣味とを一致する2	外国語に対する教養的考え方1						15
反応%	33.3	20.0	13.3	13.3	13.3	7.3						100.0
20年以上 11 28名 29.3%	賭事下品な趣味を高く評価しない4	趣味を教育に役立たせる3	多趣味であること2	スポーツに関心をもち2								11
反応%	36.3	27.2	18.1	18.1								99.7
全 体 53 162名 32.7%	賭事下品な趣味を高く評価しない4	スポーツに関心をもち10	多趣味であること9	一芸に長ずること5	趣味を教育に役立たせる5	文学的関心の高いこと3	専門と趣味とを一致する2	芸術的趣味2	科学的趣味2	外国語に対する教養的考え方1		53
反応%	26.4	18.8	16.9	9.4	9.4	5.6	3.7	3.7	3.7	1.8		99.6

てよいだろうと考えられる。
 b、二〇年以上の教歴群は反応因子種目は最も少く、又趣味を教育に役立たせると云うことも注意すべきである。

4表の9 父兄関係の内容

a、二五名の四一名がこの要素を指摘して居る。その半数が「父兄から信頼される教師」との反応を示して居る。信頼されるが進むと、それは「よき相談者」となるのである。

b、その他の反応因子は、父兄関係或いは父兄と接衝する場合の注意事項である。

c、父兄に交渉を持つ場合の原理とその方法が二五%に及ぶと云う事實は、現代教育原理の反映と云わなければならぬと考えられる。

第4表の9 父兄関係の内容分析

内容 順位 教歴及 回答率	反応及び数値						
	1	2	3	4	5	6	計
10年以下 $\frac{17}{84}$ 名 20.2%	教師10 父兄より 信頼され る	形式 的の連 絡会に 終ら	者3 父兄の よき教 育相談				17
反応%	58.0	23.5	17.6				99.9
自10年 至20年 $\frac{12}{50}$ 名 24%	教師5 父兄より 信頼され る	者2 父兄の よき教 育相談	必要 以上 に父兄 と接	生 徒本 位で 父兄 に接	入 しな い1 生徒 の家 庭内 部に 侵		12
反応%	41.6	16.6	16.6	16.6	8.3		99.7
20年以上 $\frac{12}{28}$ 名 46.8%	教師5 父兄より 信頼され る	生 徒の 家 庭内 部に 侵	必要 以上 に父兄 と接	生 徒本 位で 父兄 に接	す る2		12
反応%	41.6	25.5	16.6	16.6			99.8
全 体 $\frac{41}{162}$ 名 25.3%	教師20 父兄より 信頼され る	者5 父兄の よき教 育相談	必要 以上 に父兄 と接	生 徒本 位で 父兄 に接	す る4 形式 的の連 絡会に 終ら	入 しな い4 生徒 の家 庭内 部に 侵	41
反応%	48.7	12.1	9.7	9.7	9.7	9.7	100

五、比較考察

学習者と現職教師とに依る教師像の研究はその目標は同じであつても、その方法が違つて居るので、その結果の異なるのは当然の帰結である。従つてその結果を比較すると云うことにも若干の無理はまぬがれぬ。

1、先ず、教師像構成の要素の序列についてみると

第5表 要素に関する生徒教師の対比表

生徒・学生		現職教師	
序列	要素	序列	要素
1	一般教養 趣味 研究態度 指導技術 教育的情熱・理解 教材のマスタリー 人格・性格	1	父兄との関係 趣味 指導技術・能力 職場に於ける人的関係 教育精神・理解 人格・性格 研究態度 学識・専門知識・教材 一般教養
2		2	
3		3	
4		4	
5		5	
6		6	
7		7	
8		8	
9		9	
反応率		反応率	
八七・五		二五・三	
八七・〇		三二・七	
八七・〇		三九・五	
八六・〇		五〇・〇	
八三・〇		五三・一	
八六・〇		六三・六	
八一・五		八一・五	
八三・三		八三・三	
八七・五		九八・八	

註、生徒の要素反応表は本誌第五卷第一号一八一―一九頁より引用

a、第5表に依つて自明の如く、現職者の反応に於ては、職場に於ける人的関係及び父兄との関係の二要素が新たにあらわれて居ることに注意せねばならぬ。

b、生徒の場合、序列1から5迄何れも八八%から八三%の反応率を示し、彼等の学校生活に於ての直接要素的傾向があらわれて居る。先生の趣味とか一般教養とか云う要素は、反応率も七〇乃至六〇%を示し、序列の終尾に位して居るのである。これに反し、現職者の場合、一般教養が、殆ど一〇〇%の反応を示し第一位にあることは如何に重要なものであるかを示すものである。第二位は専門教養の八三%、第三位は研究態度の八一%で、共に教師生活の中核を形成する一角である。

c、生徒は「先生の人格」を第一位にあげて居るのに対し、先生は第四位に、然かも六三%の反応率を示して居る。更に教育の本質である教育精神、生徒に対する理解の要素は、生徒は第三位、八七%の反応に比し、現職者は五三%の第五位を示して居る。現職者の示したこの人格、教育精神要素に関する傾向は第七位の指導技術とともに予期せざる結果であつた。何れにせよ、一般、専門教養、研究の要素にあらわれた傾向は、現代教師社会の反映であるとも思惟されるのである。

d、教師反応に於ける「職場に於ける人間関係」要素は、内容的に見ても当然すぎるものではあるが、かかる要素が五〇%の反応率をもつてあらわれて来た処に、現代社会の特徴が反映したものである。同じ事が「教師の父兄面接技術」についても云えるのである。

2、教師像の性及び年令別の比較

生徒の教師の性に関する反応を（本誌第五卷一号二〇頁）見ると

男 教師

六三・一%

女教師

二五・七% を示し

年令を見ると

二〇〜三〇才

三三・五%

三一〜四〇才

三九・〇%

四一〜五〇才

一七・〇%

五〇才以上

五・〇% を示している。

これに対し、現職者は全体を通じ「女教師は困る」と答えたものが三名のみで、年令要素に関する反応は皆無であつた。

3、教師像構成要素の反応因子の比較

a、先ず、教師の人格因子について見ると

生徒は各学年層を通して七〇%迄が温しい、やさしい、明朗、熱心等の因子で占めて居る。それに反し現職教師は、積極性、責任感、社会性、革新性、正公感等の因子で七〇%以上を占めて居る。この差異は生徒は個人、又は直接接衝から来たものであり、現職者は全人的、社会的な広い立場に立つての反応であることは、明かである。

b、専門教養について見ると、教材のマステリーと云う反応に対しては、両者完全に一致して第一にあげて居る。特に生徒は八〇%以上と云う高度なものがある。教師の方は僅か二七%である。然し教師は教える事だけを知つて居るだけでは不十分で、むしろ博学、学問の综合性、教育哲学、学習者の精神衛生と云うが如き教材を中

心にした周辺知識を高く取りあげて居る。これは極めて当然の事と云えよう。

c、教育的情熱、生徒に対する理解の比較

生徒は「私を一番よく理解していた」が八〇%以上を示すと云う極端なものである。これに対し、教師は二〇%。更に教師は「愛情を持つての行為」及び「生徒から信頼、尊敬される」で全体の四〇%を占めて居る。ただし、これは教育精神の本命と云わねばならない。

d、指導技術の比較

生徒の反応因子は極めて単純なもので、「教え方が上手だった」が九〇%を示して居る。これに対し、教師は極めて多岐にわたり、技術そのものの内容から関連分野に広くわたつて居る。

e、研究態度

生徒の場合、「熱心に勉強していた」「新しい知識をよく取り入れていた」等によつて八五%を示したのに対し、教師は「自己反省」「自己の人間完成」又は「生徒と共に勉強する」「指導技術の困難性を痛感する」等の反応因子で四〇%以上を占めて居る。こゝに両者の反応特徴がよく現れて居る。むしろ、それは見解の問題であり、目標の問題でもあると考えられる。

f、趣味の比較

こゝでは両者間に全般的に殆ど差異は認められない。只、教師は第一に二七%の高率に指摘して居るのは「賭事、下品（性的なものと考えられる）な趣味を高く評価しない先生」との警告的反應である。

g、一般教養の比較

児童生徒の場合は最下位反応要素であり、その因子も「ゆたかな教養」が五〇%にも達して居り極めて軽い、平坦なものである。然るに教師側は「人生観、識見の確立」「教育者の誇りをもつ」「高い知性に豊かな教養」と云うような因子で六〇%に達せんとして居る。こゝに根本的に違うものがある。然し、教師の立場は教育者の本質である事は申すに及ばない事である。それだけに教師は教師像の要素の第一に、然かも殆ど一〇〇%の高率反応を示したものである。

h、其の他の要素

生徒の反応要素にはあらわれて居ないが教師側に於ては、

職場に於ける人的関係

五〇・〇%

父兄接衝関係

二五・三% がある。

この要素は、児童生徒の直接関係しない教師の面である。

六、要 約

1、教師像構成要素の種類については、教師の職場に於ける人的関係、父兄関係等の要素が教師反応に新たにあらわれて居る。その他の要素については一致して居る。こゝでは研究方法が問題になるが、教師に用いた自由発表の方法が本命と云わねばならぬ。

2、要素の序列については、生徒教師間に判然たる相違があらわれて居る。その原因は非常に多岐に亘るが、その主要なるものをあげれば

- (一) 生徒は個人的直接的であるのに反し、教師は全般的であり社会的間接的である。
- (二) 生徒は視野が限られて居り、教師は広く、完全を目指して居る。
- (三) 生徒は自己中心的存在であるに反し、教師は教育的な人格像を画いて居る。否むしろ教育学を目的として教師像を形成して居る。

3、各要素に於ける反応因子について見ると

- (1) 生徒の因子種数は少いのに対し、教師は多い。
- (2) 因子は生徒は単純で具体的であるに反し、教師は抽象的で警告的で広範に関連している。
- (3) 身近なもの、或いは極く自然な姿に対し、理想的な型である。

例えば、あの先生はよく勉強はして居なかつた。忘れられない先生であつた。

4、教師像に関し、生徒は先生の年令、性に関し、はつきりした反応を示して居るのに対し、教師は殆ど問題にして居ない。

5、ことなつた研究方法に依つたものではあるが、各々その目途とするところは十分に果し得た。その上、比較の出来た事は、その結果を見て極めて意義あるものであつた。更に機を得て、全く同一方法に依つての研究を進め、比較して見たいと考えて居る。